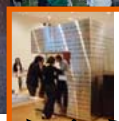
麻布地域情報紙
ザ・AZABU
Community Information Paper
Vol.3 20 June 2007
発行／麻布地区総合支所
編集／ザ・AZABU 編集室　〒106-8515 東京都港区六本木 5-16-45
電話／03-5114-8811（代表）ファックス／03-3583-3782
暮らしの疑問は、「みなとコール」でお答えします。電話／03-5472-3710

僕は明日から
会社のファッションリーダー。

展覧会は連日の混雑だ。ショップはすく入れる。



突き当たりはカフェテリアだ。
芸術だけでは生きてゆけない。
何を食べようか。

駄菓子屋のおもちゃも大人買いすればアートだ。

志ん生は存在自体が芸術だ。

特報

国立新美術館

地下

国立新美術館では常に注目すべき展覧会が開かれており連日の盛況だ。だが、そのためだけにでもぜひ足を運び、立寄りたいのが地下のミュージアムショップだ。

フランス、アメリカといった美術館先進国はもとより、日本でも力を入れ始めたこの分野であるが、結局カタログとレプリカ販売以上の積極的な価値を提示できなかった。しかしここのショップは一歩踏み出し、訪れることがひとつの芸術体験となる、刺激にあふれた空間を作ることに成功した。

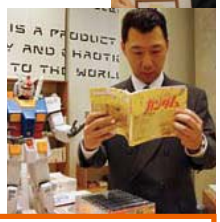
場所は、同じ地下のカフェテリアに通じる開放的な通路に位置する。普通なら落ち着かない場所だが、それを逆手に取り、美術館内にもかかわらず、祭りの境内のような不思議な賑わいをかもし出す。

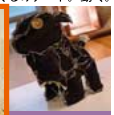
商品は、世界的なデザイナーのフィリップ・スタルクがデザインした食器、その隣は志ん生の落語本、横に子供向けのおもちゃの指輪セット、さらに向こうにミニマリズムの画集というぐあいで、一見脈絡がないように見える。ところがしばらくショップを散策していると、実は商品の展示自体が、サブカルチャーと高度に探求された純粋美術のとなりあう、混沌とした現代東京をそのまま表現していることに気がつく。また各アイテムは、それぞれその道のファンなら実に納得の行く旬のセレクトだ。

ゆえにこの場所に身をおき、アイテムを選び、さらには購入する行為そのものが自分を表現するアートになりうる。こんなミュージアムショップはざらにない。

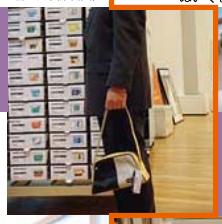
（取材・写真・文／ザ・AZABU 編集室　モデル／地区政策課職員）

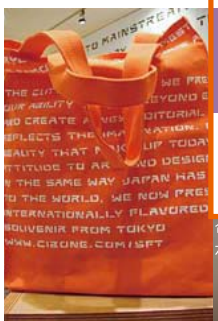
一升瓶の照明

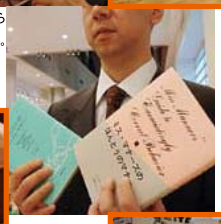



男の集団が手作りする
ぬいぐるみアート。動く。

キャッシャーも
かっこいいぞ。






料理が芸術なら
テーブルマナーも芸術だ。

合羽橋は遠い。
六本木で買う。

エアフランスでも使われている
食器セット。

すべてトラックの帆や
シートベルトが
生まれ変わって創りだされる。

これを被せれば
あまったワイングラスが
テーブルライトに変身する。

麻布びと

麻布の真実のことば

蔦屋吉五郎
（6代目蔦屋吉五郎）

麻布山善福寺は安政６年（1859 年）６月から明治８年（1875 年）12 月まで初代アメリカ合衆国公使館となり、日米修好通商条約を締結したことで知られるタウンゼント・ハリス公使以下の館員の住まいとなっていた。

その善福寺門前にある理髪店「Ｉ．Ｂ．ＫＡＮ」。洒落た店構えと赤い日よけテントにはさみのマークと店名・・・・その上に小さくｓｉｎｃｅ　1818 と書いてある。うっかり見落としてしまいそうだが、1818 年と言えば文政元年、今から 180 年以上も前のこと。その当時からこの地で代々続く店を現在７代目蔦屋吉五郎として守る西原道雄さん（56）。ハリスの日記に「門前の床屋を呼んで剃らせた」と出てくる「床屋」さんの子孫である。またお店のホームページ「マスターの部屋」を見ていただくとわかるように筋金入りのビートルズファンでもある。

◎創業は江戸時代だそうですね。

西原　そうなんです。私は蔦屋吉五郎の７代目になります。江戸時代は屋号を「吉床（きちどこ）」、それから「蔦屋」と言っていたんですね。蔦を英語に直すとＩＶＹなんですが、昔流行った「ＩＶＹ」と間違えられるって言うんで「ＩＢ」・・・インターナショナル・ビューティーということで「ＩＢ館」にしたんですよ。お客さんがこのロゴを作ってくれましてね。実は 1818 年創業と書いてあるんですが、実際は 1700 年代なんですよね。「文政の頃創業」と言われていたので文政元年が 1818 年なので語呂もいいからこの年にしたんですけど、1856 年ハリスの髪を切った３代目が頭を張ってやっていたと考えると年代的にちょっと不自然でね。どうしても 1700 年代だろうと・・・。でももう年表も作っちゃったし、お客さんに「2018 年になったら何か盛大な催し物でもやるの？」なんて聞かれるし今更変えられねぇなあ（笑）と思ってね。

理髪店「I.B.KAN」と西原道雄さん

◎ずっとこの場所ですか？

西原　ずっと同じなんですよ。なんて言うんですか、その間に出世するやつもいなかったし、夜逃げするやつもいなかったというところですかねぇ。６代前なんて言ってもぜーんぜん知らない人だしね、この「かみひとすじ」にも書いてありますよね。伊予松山藩の藩士だった初代が家出して江戸に出て来てぶらぶらしていたら、その頃は自身番（江戸の警備にあたる為に各地に設置された通称番屋）というのがあって、今でいうフリーターみたいな者が「自身番預かり」というのになって・・・交番手伝いみたいなものですか。ところが昔は自身番の隣か前に大抵髪結いがあったそうなんですよ。それで結局見習いを始めて髪結いになったんですね。

この「かみひとすじ」には、百聞を彷彿させる飄々とした文章で 13 歳にしてハリスの顔を剃った４代目のエピソードなどが大変面白く書かれている。４代目は或る日外国人の髯そりにあきあきした３代目の父にハリスの髭剃りを命じられる。

「お前で駄目だなんてぬかしやがったら、こっちで断ってさっさとけぇって来い」しかし案外気に入られてハリスは『チイサイトコヤサン』と言って大変可愛がり、毎日いろいろなものを呉れて寄越したそうである」

西原　1856 年にハリスが日本に来て、みんなちょん髷しか切ったことないでしょ。頭が刈れないんですよ。それで最初の頃は馬車に乗せられて「西洋風理容」を学ぶために横浜まで連れてゆかれたらしい。遠いですよね。丸一日くらい掛かっていたのではないですか。

そして「門前の床屋さん」の登場。父に代わって来るようになった４代目に毎日お菓子をくれたり、・・・あるときはピストルまで貰って来て『チイサイトコヤサン』は父にも言えずこっそりと物置に隠しておいたそうである。

◎６代目のお父様は理容関係の理事をされていたとか？

西原　全国理容講師会というのがあるんです。理容の先生ですね。ここの理事長をしていたんですね。東京都の優秀技能賞といういろんな業種の職人さんに贈られる賞から現代の名工、そして勲章までいただいてね。

◎お幾つの時にこのお店をあずかったのですか？

西原　19 歳で理容学校を卒業したんですよ。それから５年間三鷹の方で修業しました。24 歳でこの店に入ったんですが、いきなり「帰って来ました」と言っても全然知らない人ばかりで、お客さんは全部おやじのお客さんだしねぇ。それから２～３年して屋号を変えるかということになった頃からですかねぇ、大体私がやるようになってきたのは・・・。三鷹には何店舗も持っているやり手の方がいて、その方がおやじと仲が良かったもので預けられたんです。預けられたというか、島流しにあったというか（笑）・・・近いとすぐ逃げて来るとわかっていたんでしょうね。その頃は「いつ辞めてやろうかな」とずっと思っていましたよ。自分で店をやるようになってあまり思わなくなりましたけどね。

◎どういうお客様が多いのですか？

西原　90％以上が固定のお客様ですかねぇ。土地柄外国の方が１割から１割５分かなあ。地元の方がやはり多いですよ。我々の業界も高齢化が進みましてね。例えば麻布で床屋が 25 件あるんですよ。今私はそこの支部長をやっているんですが、今年 57 歳になるんですけどね、経営者の中で一番若いんですよ。

◎今の若い方と西原さんの時代で違いはありますか？

西原　はい、それは待遇面で全然違いますね。前は1つの部屋に８人くらいのたこ部屋でしょ。今はひとりワンルームだし、休みが多い方がいいとか、給料がいいとかね。昔は息子さんと親御さんが一緒にみえて、「お月謝はおいくらで？」なんて聞く方も中にはいましてね。いえいえ、お月謝はいただいておりません、少ないけどお給料をお支払いしています（笑）と・・・。大体５年を目処に教えていますね。うちには今若い子が４人いてみんな実家がこの商売なんですよ。２代目３代目の子でねぇ。だから５年すると帰るのかなあ。跡取りですか？まあどうでしょう？何代まで続くんですかねぇ。

◎ビートルズがお好きということですが、何かコレクションは？

西原　いやぁ、あんまりね・・・ポスターとか古い雑誌はあるんですけどね。圧倒的に前期のビートルズが好きですねぇ。レコードはここにもあるんですけど、もうシミになっちゃった（笑）。お店ではたまぁに流しますかねぇ。

（紙面の関係で詳しく書けないが、お店の２Ｆはビートルズファンにはたまらない空間が・・・ファンの方必見）

西原　・・・ちょっと待って下さいね。（帰るお客様に）・・・どうもありがとうございました。

◎必ずお客様はお見送りされるんですね。

西原　それはやっぱりね、ちゃんとお見送りはしないと・・・。仏頂面して帰られると「ありゃ～、こりゃあ困ったなあ」と思いますけど（笑）・・・。大体喉元にカミソリあてられて命預けてるようなものでしょ。どうにでもしてくれと・・・でも９割の方は床屋で寝ちゃうんですよ。気持ち良くてね・・・。そんな風に皆さんリラックスしてくれるわけですよ。お客様が帰られる時に「ああ、気持ち良かった、ありがとう」と言って帰られる時がいちばんの喜びですからね。

７代も続く老舗である西原氏のお宅には、６代目のお父様が書かれた「かみひとすじ」、理容専門誌に残された記事など貴重な資料が多く、ハリスと『チイサイトコヤサン』の交流の微笑ましさなど今回の取材前に興味深く読ませていただいた。６代目の残された言葉の中に「バーバーへ来たお客さんがいい気持ちになったとかスッキリしたとかいって、その人たちに働いてもらって国家がうるおう、そういう商売だと思うんだ、われわれの商売は。」という一節があり、7代目の最後の言葉とだぶる。修業時代は八方破れでずっと辞めることを考えていたという7代目だが、老舗のDNAは確実に受け継がれていくのだなと妙に納得した。日本一古いであろう床屋さんはかみひとすじに何代続いていくのだろうか。

「かみひとすじ」は６代目蔦屋吉五郎にあたる道雄さんのお父様二郎さんが書かれた「西洋理髪事始め麻布版」という随想。

（取材／木村定光、伊東みゆき　文／伊東みゆき）

ネイチャー探険隊

都会の喧騒は届かない

入口

麻布水系の自然池だ

湧水が流れ込む

麻布山系の水源のひとつ。80年続く南麻布の釣堀。

麻布地区の中でも、南麻布の本村小学校周辺は比較的昔ながらの匂いを感じさせる佇まいを持つ。小学校脇の小さな路地を入っていくと、そこに小さな釣堀がある。ここは都会の喧騒を忘れさせてくれる憩いの空間だ。この一帯だけが時間の流れが止まってしまったかのようなやすらぎを覚える。

ここは麻布山系の湧水が流れ込む自然の池で、ヘラブナ釣りが楽しめる。営むのは、坪田さんご一家。なんと大正時代に創業し、今年で80年を迎えるとか。地元の方はもちろん遠方からはるばるやってくるファンも多いそうだ。見ると、ちょろちょろと水が湧き出し、池の水は四の橋付近の古川に注ぎ込んでいるそうだ。多くの水源が埋め立てられた古川だが、この池だけは時空を超えて佇んでいる。近くには六本木の歓楽街や六本木ヒルズ、東京ミッドタウンがあり、都会的で先駆的なイメージの麻布界隈だが、一歩奥に入れば、こんなにも懐かしい小さな自然が生きていることを考えると、とても不思議である。

ヘラブナ釣りはなかなか奥が深くて面白い。仕掛けの整った竿を貸してもらい、池のへりに座布団を敷いて座る。なんともこれが落ち着く。たとえ釣れなくても仕事を忘れてくつろげるのだが、やはり釣ってみたい。浮きの動きを頼りに池の中の魚を想像する。浮きが微妙に動き、竿を上げる。見ると、餌が食われている。素早いヤツだ。これを何回か繰り返すうちに、やっと待望の一匹を釣り上げた。やはり釣れるとうれしい。となりを見ると、常連らしき初老の男性がいとも簡単に魚を釣り上げているではないか。まるで網で魚をすくうように。これには正直驚いた。

仕掛け付の貸し竿

初心者にはなかなか難しいが、久しぶりに至福のひとときを過ごさせていただいた。池に少ししかいない赤ベラを釣ったら、割引券がもらえるそうだ。くじ引きを当てるようで、これもまた釣り人をわくわくさせる。

取材を終わり麻布十番に出ると、芝居小屋から出てきたような不思議な感覚になった。都会の中の小さな楽園は、いまもこれからも同じ姿で来訪者のココロを癒してくれることだろう。

（取材・写真／木村定光、尾崎恭彦　文／尾崎恭彦）

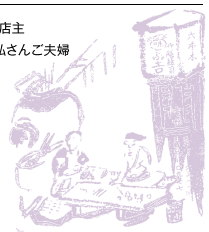
生麩 ここに技あり！

生麩は私の誇りです。

六本木交差点の喧騒（けんそう）が引く、早暁午前4時前、六本木トンネルの道の階段下、国立新美術館側、六本木7丁目にある麩司、「ふ吉」（ふよし）は、仕事を始める。

生湯葉は、生麩（ふ）は、何から作られるか、ご存知ですか？　生湯葉は大豆から、生麩は小麦から作られる伝統食品です。小麦から分けられた粘弾性を持つグルテン（たんぱく質の一種）が麩の主役で、長持ちする焼き麩と違い、生麩は、もち粉、じょうしん粉、蓬（よもぎ）、青海苔等を加えて、湿度、温度、風等に配慮しながら、手作りされ、新鮮さをいのちとしています。

［ふ吉］店主
岩本　弘さんご夫婦



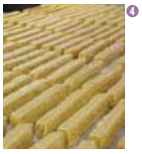
精進、懐石料理に影響を受けた京料理の膳には、先付、煮物椀、八寸、炊き合わせ、菓子等々があり、各膳を通して、全体で起、承、転、結の趣があります。生麩は、先付け、八寸、菓子等に多く用いられていますが、各膳に応じられるように粟麩（あわふ）、蓬麩（よもぎふ）、手まり麩、麩まんじゅう等が製造され、魚や野菜と同じ様に、板前さんによって蒸したり、煮たり、揚げたり等の調理が加えられ、更に各季節に応じられる様に工夫され、京料理に欠くことのできない素材食品です。

「ふ吉」の岩本夫人は、『お得意様の老舗料亭で、料理された「うちの生麩」が美しい器に盛られて出てくると、可愛がって育てた子がハレの衣装を着たようで、嬉しいですね』と目を細められた。

「ふ吉」の生麩、生湯葉は、有名老舗の料亭等からの受注製造だけなので、「これで良い」という生麩を作るのは、日々精進のようです。なぜ、工夫を重ねるかと言えば、江戸時代に完成に近づいた日本料理は、総合プロデューサーの料亭主、料亭の「しつらえ」方（かた）の大工さん、お皿、お茶碗の陶芸師、料理方の板前さん、材料方の麩司、八百屋、魚屋さん等の色々な職方の意地の張り合いを経て、お客様の膳に、料理の美しさ、美味しさが結実するからです。

板前さんの期待にこたえる努力は、伝統継承食品を作る麩司が持つ宿命で、それを修業時代に体得したのが、「ふ吉」の岩本さんの真骨頂で、この仕事を誇りとする理由です。

岩本さんは、名刺に「純京　生麩・湯葉製造所」と書いている。「純京」とは、京料理の伝統的生麩や生湯葉を製造している事と、岩本さんがこの仕事に執念と工夫を注いでいる決意を表している。



❶ふ吉の扁額
❷手まり麩、もみじ麩、桜麩、粟麩、蓬麩等
❸麩まんじゅう作り
❹生湯葉作り

（取材／金子成一、伊東みゆき、森　明　文／森　明）

麻布の"世界"から SWEDEN

スウェーデン
面積：約 45 万平方キロメートル（日本の約 1.2 倍）
人口：約 908 万人
首都：ストックホルム（人口 77 万人）
言語：スウェーデン語
宗教：福音ルーテル教
略史：1100 年代：王国として統一始まる
1630 ～ 1648 年：ドイツ 30 年戦争に介入、ウェストファリア条約で大国の地位確保
1814 年：ナポレオン戦争後、キール平和条約締結。以降非同盟・中立政策。
1946 年：国連加盟
1995 年：欧州連合（EU）に加盟。
政体：立憲君主制
元首：カール 16 世グスタフ国王（1973 年 9 月即位）
議会：一院制（349 議席　任期 4 年）
政府：非社民連合 4 党連立政権（2006 年 10 月成立）

外務省ウェブページ
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/sweden/data.html より

取材協力／スウェーデン大使館　www.sweden.or.jp

勤勉・勤労そして冒険をいとわぬ文化、スウェーデン

３月下旬から４月上旬にかけて、スウェーデン王国のカール16世グスタフ国王御夫妻が国賓として来日された。このニュースを聞き、平成19年3月27日、グスタフ国王が天皇、皇后両陛下と共に上野の国立科学博物館で、スウェーデンの植物分類学者カール・フォン・リンネ（1707−1778）展を御覧になられたと報じられたことを思い出した。

歴史の時間に学んだが、リンネの弟子のカール・テュンベリ（1743−1828）が、故国スウェーデンを後にしてオランダ東インド会社に入り、1775年オランダ商館付き外科医として長崎に来たことは、スウェーデンと日本の交流史の中で特筆される。テュンベリは1年余り滞在し、多くの植物の標本を採取して帰国、学者の道を歩み、大学の学長になったそうである。蘭学を日本にもたらしてくれた恩人の1人であり、その時の植物標本は、スウェーデンに現在も保存されているようである。

六本木1丁目にあるスウェーデン大使館は、斬新なデザイン建築で、桜や木々に囲まれた環境に見事に溶け込み、瀟洒（しょうしゃ）なたたずまいをみせている。お話しを伺った報道参事官のヨアキム・ベルイストロムさんは、長身の理路整然とした理性的な方で、白夜が起きるスウェーデン北部のご出身とのことであった。報道参事官として、国王王妃両陛下が来日されたときも同行し、多忙を極めた。

ベルイストロムさんが初めて来日したのは高校生のころ。渾然（こんぜん）とした都市、東京に親しみを抱きながらも、日本文化のある面は理解できず、違和感を持たれたそうだ。まじめで勤勉・勤労な国民性はスウェーデンに似ているとも感じたという。スウェーデンの人々についてさらに伺うと、冒険をいとわぬ文化を持ち、海外に旅することが好きな人が多いそうだ。テュンベリの来日も、当時としてはとんでもない大航海であったと考えられるが、異なる文化に興味を持ち、新しいことを恐れない積極性は今も昔も変わらない。福祉のみならず、ＩＴ等の様々な分野において世界の手本となる手法を生み出し、安定した成長率と生産性を維持する秘密もそこにあるのかもしれない。

日本に対する興味も高く、特にアニメやマンガの影響で今は日本ブームですよとベルイストロムさんは教えてくれた。近年、生活デザインや映画制作にも力を入れており、アートに関するイベントなども多く行われている。

大使館の周囲は、坂道や桜の木が多い麻布の地区なので、その印象をお尋ねすると、自転車でよく出かけるので気に入っていますとの返事が返ってきた。坂が多いので逆に大変なのではと伺うと、坂道でのエクササイズが健康によいのだそうだ。さすが勤労な国民性である。一方で、桜は花が咲く前の「つぼみ」に美しさを感じる、という繊細な美意識も持ちあわせておられた。

オスカー賞を生涯、三度受賞し、一世風靡したスウェーデン出身の女優、イングリット・バークマン（1915～1982）が、映画「カサブランカ」で、ハンフリー・ボガード（1899−1957）と交わす、物語の最後の台詞（せりふ）は、「IT IS A BEAUTIFUL FRIENDSHIP BETWEEN US」であった。北欧の国スウェーデンとの関係も、熱い思いを持ちながらテュンベリに医術を学んだ時のように、より深く美しい FRIENDSHIP を保ち続ける国と国でありたいと願いながら、大使館を後にした。

（取材・文／加藤智恵、森　明）

❶斬新な外観のスウェーデン大使館
❷取材風景
❸大使館の歴史を記した書物を見ながら

街のへぇ〜！

寛永時代のMOTTAINAI
お竹大日如来堂

雀子や　お竹如来の　流し元

一茶

東京タワーの脚下、増上寺別院の心光院、文化庁の有形文化財の表門をくぐると、「お竹大日如来堂」がある。ふっくらし、慈愛に満ちたお顔のお竹如来様は、やさしく迎えてくださる。一粒のお米を大切にして、黙阿弥の歌舞伎、豊国等の浮世絵にと取り上げられたお竹様は、MOTTAINAI文化の原点なのかもしれない。

「お竹堂」の床は法隆寺夢殿を思わせる八角形で、お屋根が変形四角形のモダンで、小さな超空間は、「二十四の瞳」の原作者壺井　栄さんのご子息、戎居（えびすい）研造氏の設計である。　（取材・文／森　明）

麻布の几号水準点

「きごうすいじゅんてん」と読みます。

１８７６年（明治９）頃から内務省では地図作成、地籍の測量のために高低測量（水準測量）を開始しました。この測量で用いられた標石が各地に残存しています。麻布地域にはただ一つ、ロシア大使館前に残っています。当時設置にあたっては、鳥居、灯籠、建物など永久構築物に刻印された場合が多く、港区だけでも10数箇所あるようです。散策がてら探してみてはいかがですか？

（取材・文／伊東みゆき）

WAFFLE,WAFFLE 美味しいワッフルのお話。

この絶品にめぐり逢って数十年。カスタードクリームとあんずジャムの二種類。ふんわり、ふんわりの皮に何か書いてある。ひろげて見てみる。真ん中にWAFFLEと英文字でつづられている。その文字の上下にYEISEI,JIYOとローマナイズされた英文字で、しかも本体？のと書体が違う‼

うわぁ〜‼

私がまだ小さい頃、おじいちゃまが美味しいものの説明に必ず『これは滋養があるんだよ…』と言っていた。今で言う栄養ね。美味しいものは世の中に一杯あるけれど、こんなに楽しい、おもしろい、うれし〜いお菓子を私は他にはなかなか見つけられないでいる。

先日、あのタカさんの番組で各ゲストの方達のおみやげで好評だったもの特集をやっていた。ハンサムボーイの松岡クンのおすすめとして紹介されていた。

TVスクリーンの中で、お店の三代目の当主と四代目のジュニアが焼いていらした。

それ以来『お店が大変な事になっているのよ‼』と若奥様がおっしゃっていた。

おそるべし“CHANNEL 8”‼

これからもズ〜ッと死ぬまでこのWAFFLEが好き！！美味しいものをずっと変えることなく作り続けて下さって、ありがとうございます。と感謝を込めて描かせていただきました。

（イラストレーション・文／湊　早苗）

不思議と不思議な石壁画

大きな謎の石壁画（せきへきが）に、不思議な麻布が刻まれている。実に奇妙で、上半分に江戸時代と思（おぼ）しき家や鳥居、景色が刻まれ、下半分に東京タワー、現在の麻布地区総合支所など今の街並みや船までが画かれ、その間に、絵巻の様にたなびく雲煙（うんえん）を描いて、時間と空間を越える様な表現で石壁画が描かれている。さらに、石壁画の中央に、3分の1を超える大きさの銀杏（いちょう）のような長寿を示す野太い幹と、ていていと▲（三角）の葉が繁る大樹が、でんーと根を張っている。石壁画の下部に、右から左へ、上になり、下になり七羽の鳥が翼を広げて躍動的に飛んでいて、その翼の上に色彩豊かな「松」の枝葉二つ、「太鼓とバチ」、「銀杏」の葉四枚、かぼそい「柳」、「洞穴（どうけつ）と尾のある後姿の狸」、彩色の「石」、多色の波紋の「池」がデフォルメされて描かれている。

麻布の七不思議である。

この麻布の七不思議は、七バージョンほどあり、明治、大正、昭和、平成、各時代で、謂（い）われも、不思議そのものも、少しずつ異なっている。不思議のひとつの「狸穴」は、「たぬきおやじ」や「たぬき寝入り」の様に、「たぬきあな」と読まず、なぜか「まみあな」と読むのも不思議である。ことの原因や理由が分らない七不思議の不思議でもある。

麻布地区総合支所に、作者不明のこの石壁画と、他に七不思議が書かれた地図があり、おのおの、総合支所のどこにあるかは、お越し頂き、探される事をお勧めしたい。

七不思議を探す事で、さらなる不思議なひと時を体験して頂けると思うが、しかし夕暮れ時、狸穴の狸が六本木に出没するとか、しないとか、くれぐれも化（ば）かされぬようにご用心めされよ。　（取材・文／森　明）

あなたの声聞かせてください。

『ザ・AZABU』では、港区麻布地域に暮らす方々に向けて、楽しく心が豊かになる情報をお伝えしていきます。より魅力的な紙面にするために、読者のみなさんのご意見・ご感想などを募集いたします。

- **いま、最も関心のあること**
  （港区麻布地域での出来事など）
- **今後、紙面で取り上げてほしい話題、ご意見、ご質問**
- **麻布地域で風光明媚な場所**
  （写真に撮りたくなる美しい景観）‥‥など、

どしどしお寄せください。電話、ファックス、郵送で受け付けています。

宛先は、紙面表紙（題字横）をご覧ください。情報等をお寄せいただいた方には、ささやかながら記念品を差し上げます。お待ちしてまーす。

麻布の軌跡

女流画家と西洋美術の出会い

明治中期に渡伊し活躍した洋画家ラグーザ玉。
元麻布・長玄寺にある女史の墓には今でも焼香がたえず、
海外からも問い合わせがあるという。
女史が才能を開花させる契機となる美術教師ラグーザとの
出会いの足跡をたどった。

麻布の地に眠る女流画家

有栖川宮記念公園（南麻布５丁目）の緑に囲まれた一画に、威風堂々馬上豊かに鞍にまたがる有栖川宮熾仁親王の銅像がある。作者は西洋式銅像製作の先駆者といわれる大熊氏廣（安政３年～昭和９年）。明治９年、伊藤博文の発案で虎ノ門に創設された工部美術学校彫刻科を首席で卒業した学生である（註1）。

公園から歩くこと数分、中国大使館裏手の長玄寺（元麻布３丁目）で、今度は一人の女流洋画家を偲ぶ記念碑を見つけた。

ラグーザ玉。奇しくも大熊の恩師であるヴィンチェンツォ・ラグーザ（天保１２年～昭和２年）の夫人で、日本洋画史の黎明期における女性画家である。ラグーザは工部美術学校の開校にあたりイタリアから招聘され、当時の日本では画期的な石膏彫刻等を指導し、弟子を「芸術家」に育てた（註2）。

一方、玉もラグーザから才能を見いだされ、個人指導を受けて急速に洋画の腕を上達させた。

のちに玉は、ラグーザと共にイタリア・パレルモに渡り、昭和８年まで現地で画家として活躍することになるが、彼女の描く絵は、南欧の絢爛優婉なる色調と、日本人特有の構図の妙と典雅の筆致を持っていたと言われる（註3）。

工部美術学校を含む工部大学校は当時浮世絵にも描かれる名所だった。「東京名勝開化真景虎門工学局」港区立郷土資料館所蔵

玉は美術学校の生徒ではなかったが、どのようにして当時ラグーザと出会ったのだろうか。

古地図でたどる玉の生家

「ラグーザ玉自叙伝」（以下、「自叙伝」）によれば、時は明治１１年頃にさかのぼる。

玉が自宅の庭に面した縁側に机を持ち出して扇面に花鳥を描いていたところ、「髪も髭も真黒な」ラグーザが「いい絵ができますね」と愛想を言いながらそばへ寄ってきた。ラグーザは玉の絵筆を借りて人の顔を描いたあとで玉の絵を指導し、さらに日本の絵は立派だが、光線と立体を殺してはいけないと話したという（註4）。

まさに記念碑の碑文にある通り「偶々（たまたま）」な出会いだが、ラグーザと玉は当時どこに住んでいたのか。

「新修港区史」には明治１２年当時の工部省の雇外国人居住地として、芝区三田小山町２番地２，５８８坪が記載されている（註5）。

「自叙伝」でも「（『清原お玉』と言う胸像を作るために、）１週間位、小山町の邸に通いました」との記述がある（註6）。また美術学校卒業生の一人である佐野昭も同様に、「（ラグーザは）三田の小山町の官舎に住んでいて、騎馬で（略）学校に通って居ました」と述べている（註7）。ラグーザは三田小山町２番地に住み、馬で赤羽橋から飯倉を通り、美術学校へ通っていたようである。

碑文には堀通名、菊池錆太郎ら美術学校の教え子たちが名を連ねる。碑のある長玄寺は、風林火山で有名な山本勘助の末孫が開基した由緒ある歴史を持つ

また、「自叙伝」によれば、玉の生家は「将監橋のじきそば」で「薩摩様お邸に面した表通りに一軒、それから庭の中に新家一軒、古家が一軒、都合三軒」あった。明治１１年頃には「広い屋敷内に築山を作ったりして、花園を経営し、（略）園内に茶店や大弓場も設けていました」とある（註8）。また、「ラグーザ玉伝を検証する」でも、河岸地の空き地を玉の父である定吉が借り受けて花園を設けていたとの推定がある（註9）。

当時の地図にも大的場が記されていることから新堀川の川沿いに玉の家があったと思われる。余談だが、増上寺別院心光院（東麻布１丁目）さんのお話と「芝区誌」を併せると、昭和８年に帰国後、玉の姪の清原初枝さんとともに住んだのは新堀町３１番地（現・芝２丁目）だったようだ。玉とラグーザの家の距離はわずか1km前後。玉とラグーザの出会いは、赤羽橋を挟んで互いの家の近さにも関係したことは否めない。冒頭の「自叙伝」の記述からも、最初から玉はラグーザに尊敬の念を持ち、絵を中心に結ばれていたように思える。玉とラグーザの交流は、彫刻や絵画などの中に流れる「美」を契機にして、師弟として甘美な時を過ごしたのかもしれない。

長玄寺の居間に飾られている油絵「牡丹」。ラグーザ教授との出会いを偲び描かれたのか

図版上：玉女史の生家と思われる場所（現芝２～３丁目、赤印）。
新堀川岸、増上寺、赤羽橋、将監橋（しょうげんばし）の間に「的場」がある。
弘化三年「増補港区近代沿革図集」より

図版下：ラグーザが住んでいたと思われる外国人官舎（現三田1丁目、赤印）。
明治９年「増補港区近代沿革図集」より

（註1）「近代の美術」第46号「フォンタネージと工部美術学校」（至文堂）ｐ91
（註2）金子一夫「第2章　実学の黎明－東京医学校と工部大学校　工部美術学校における絵画・彫刻教育」
「東京大学創立120周年記念東京大学展　学問の過去・現在・未来」所収
（註3）長玄寺碑文
（註4）木村毅編「ラグーザお玉自叙伝」（恒文社）ｐ35－36
（註5）港区発行「新修港区史」ｐ444
（註6）木村毅編　前掲書　ｐ47
（註7）青木茂編「明治洋画資料　懐想篇」所収「旧工部美術学校の彫刻部」（中央公論美術出版）
（註8）木村毅編　前掲書　ｐ17、ｐ31－ｐ32
（註9）早川義郎著「ラグーザ玉伝を検証する」（えあ社）ｐ28

執筆に際し、長玄寺、心光院、早川義郎 各氏に御教授頂き感謝を申し上げます。

（文／森　明　文・写真／西野さつき　タイトル／高橋　光）

ラグーザ玉
（文久元年－昭和14年）

洋画家。幼少から日本画を習い始め、明治９年工部美術学校設立の際、イタリアから招聘されたラグーザに個人的に洋画を学ぶ。明治１５年渡伊し、ラグーザがシチリア島パレルモに開いた美術学校の副校長となる。ラグーザ没後、木村毅の小説で日本でも業績が知られるようになり、昭和８年帰国。生家で晩年を過ごした。

街ウォッチャー

パシャ

ウル・リッヒさん

畠山佳織さんと畠山節子さん

パシャ

池谷みどりさん

パシャ

今回の撮影は、六本木6丁目の
けやき通り付近でおこないました。
とんでもない悪天候にもかかわらず
雨にぬれながら必死に撮影をお願いしました。
そんな我々をかわいそうに思ったのか、
これだけの人が協力してくれました。
みなさん、ありがとう！

（取材／松井 聡、加藤智恵、伊東みゆき）

これからも
街で撮影をしますので、
みなさ～ん！
怪しい目で見ないで、
ぜひご協力ください！

マシュー・バックナーさん

パシャ

パシャ

ロバちゃんとみほちゃん

パシャ

正井啓介さん

Living in AZABU

☆6月はアジサイの花の雨が降る☆

アジサイはお好きですか?
季節季節のそれぞれのお花を
お散歩しながら見て歩くのが好き。

港区政60周年記念事業で区役所の方達が、麻布地区の下記の公園にいろんな種類のアジサイを'06 6月～'07 3月にかけてたくさん植えてくださったそうな。

ハワイで毎年イースターの頃になると、ピンクのギザギザ花びらのちょっとハイカラな HYDRANGEA が売り出されていた。
もちろん今は日本でもシーズンになると、ありとあらゆるアジサイがお店に並ぶ。
あのピンクのお花を見ると HONOLULU を想う。

さあ、今年はかっこいいレインシューズを買って、
雨の中さわやかな”アジサイ公園”を全～部見てまわろう。
rainy season が始まります。　I'm mady for it !!

一の橋公園、新広尾公園、中ノ橋児童遊園、
南麻布一丁目児童遊園、古川沿緑地。

（イラストレーション・文／湊 早苗）

麻布地区 総合支所だより

はじめまして。4月1日付で、麻布地区総合支所長を拝命いたしました、小池眞喜夫です。どうぞよろしくお願いいたします。

3月末まで教育委員会事務局庶務課におりました。総合支所の仕事はこれまで経験したことはありませんが、全力投球してまいる所存です。

さて、区役所・支所改革がスタートして2年目となる本年は、初年度であった昨年と異なり、その真価が問われる年といえます。

昨年、総合支所には新たに多くの仕事が本所から移管され、それに従事する職員が配属されました。職員も慣れないことが多く無我夢中のところがあったと思いますが、麻布地区にお住まいの区民の皆様も、改革っていうけれどどこがどうかわるのか、区民サービスがどのように向上するのか、半信半疑であったというところが実情ではなかったでしょうか。

この1年間を振り返ったとき、総合支所にご来庁いただいた方に必要なサービスの提供を通じてご満足してお帰りいただくことができているでしょうか。問い合わせや相談、要望などの処理は適切に行われているでしょうか。

評価をいただいている点もありますが、まだ十分でない点もあると思います。

私たち麻布地区総合支所の職員一同、さらにサービス向上をめざし努力してまいります。どうかいろいろなご意見をお寄せください。

歴史と伝統がいきづき、多くの大使館があって外国人が多く住む、国際色豊かなこの麻布のまちをより住みやすいまちにするために、区民の皆さんと一緒に考え、一緒に行動してまいりたいと思います。

ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

西麻布福祉会館舞踊教室発表会 第25回 ゆかたざらいの集い

とき／平成19年7月29日（日） 午後1時開会
ところ／西麻布福祉会館敬老室
お問い合わせ／西麻布福祉会館
電話／03-3486-9166

「集い」は昭和58年西麻布福祉会館開設と同時に開催され、今回で25回をかぞえます。今では西麻布界隈の夏の風物になりました。歌謡舞踊の妙味をご堪能ください。

東麻布商店会

「麻布のE街」キャラクターを募集します。

東麻布商店会は、元気な商店街に変身させるため「笑顔のあふれる街」「選ばれる街」「エンターテイメントの街」の頭文字を示す「E」をコンセプトに、商店街活性化事業を５年間集中的に取り組んでいきます。

そこで東麻布商店会では、変身コンセプトの「E」をイメージでき、思わず手に取りたくなるような親しみやすいキャラクターを募集します！

応募資格、応募方法、応募先等の詳細につきましては下記ホームページをご覧ください。

最優秀賞：１点（10万円）
佳　　作：２点（記念品）
応募締切／平成19年6月30日（土）必着
MINATO あらかると
http://www.minato-ala.net
問い合わせ／東麻布商店会（担当：長谷川　進）
電話／03-3583-1906

麻布警察署からのお知らせ

平成19年4月1日（日）から「古川橋交番」が「古川橋地域安全センター」に変わりました。

「古川橋地域安全センター」は地域安全活動の拠点や各種ボランティア活動などの交流場所として昼間帯を中心に警察官OBである「地域安全サポーター」が勤務しています。

「地域安全サポーター」は、自治体等方面と」連携をとりながら、地域住民の方々の安全で、平穏な生活を確保するため様々な活動を行っています。

また、「地域安全サポーター」が不在の場合でも、テレビ対話システム等で警察官と直接会話が出来る様になっています。

「地域安全センター」は赤色標灯（交番）から青色標灯に変わり、名称は青色看板に「古川橋地域安全センター」と表記されます。

「地域安全サポーター」の服装は、制服で、ライトブルーの帽子とネクタイが特長です。

麻布消防署からのお知らせ

ご注意！ 住宅火災による死者が急増中です。

火災の早期発見に有効な、住宅用火災警報器を設置しましょう。

問い合わせ／
麻布消防署
電話／
03-3470-0119
飯倉出張所
電話／
03-3584-0119
http://www.tfd.metro.tokyo.jp/hp-azabu/index.html

麻布地区総合支所では、区民とプロのジャズバンドの音楽交流の祭典

「麻布フェスタ」を開催します。

結成56周年を迎えた日本ジャズ界の大御所、“原信夫とシャープス＆フラッツ”が特別ゲストです。原信夫さんは麻布地区在住。地域の方と音楽を通じて交流を深めたいとの強いご要望により、当日は、地元小中学生や福祉会館利用者との音楽コラボを計画中。

●保育園児、小中学生、福祉会館利用者、区民の音楽バンドの皆さんなど、当日は、歌に、踊りに、音楽にと「楽しいフェスタ」を予定しています。

●ゲームコーナー、楽器を手作りしてプロと共演、デキシージャズの練り歩きなど、当日の会場には楽しい企画が盛りだくさん！

とき／平成19年6月23日（土）
正午～午後6時
雨天決行（強風の場合は中止）

ところ／アーク・カラヤン広場
（港区六本木一丁目1番）

入場・参加費／無料

お問い合わせ／麻布地区総合支所
地区政策課　電話／03-5114-8812
地区活動推進課　電話／03-5114-8805

ザ・AZABU

●配布設置場所ご案内
六本木1丁目、六本木、広尾、麻布十番の各地下鉄の駅、ちいさな車内、みなと図書館、麻布図書館、麻布福祉会館、西麻布福祉会館、飯倉福祉会館、本村福祉会館、大平台みなと荘、麻布区民センター、麻布地区総合支所等

●本紙掲載の記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。

Chief 尾崎恭彦
Sub Chief 伊東みゆき
Staff 加藤智恵
金子成一
木村定光
高橋　光
西野さつき
松井　聡
湊　早苗
森　明

編集後記 今号から紙面デザインを一新しました。より読みやすく、おしゃれな麻布地域情報紙としてみなさんに「！」なネタを発信するべく走り回っています。編集室ではあーでもない、こーでもないと、麻布を斜めから見たり、逆さにしてみたりと四苦八苦しています。これは！たんなる地域情報紙ではないな。なかなかやるな！と思っていただけるためには、編集委員たちがそれぞれ肩のチカラを抜いて楽しむことだと思うのです。みんな本気で遊んでいる今日この頃です。（編集長／尾崎恭彦）

「みなとコール」は暮らしの疑問にまとめてお答えします！
区役所のサービスや施設案内、催し情報など、お気軽にお問い合わせください。
年中無休／午前7時～午後11時　※英語での対応もいたします。
電話／03-5472-3710　ファックス／03-5777-8752
Eメール／info@minato.call-center.jp
"Minato Call" information service
Minato call is a new city information service, available in English every day from 7 a.m. – 11 p.m.
Visit Minato Call at Tel.: 03-5472-3710; Fax: 03-5777-8752; , E-mail: info@minato.call-center.jp